
よろしくお願ひします

しんりくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よろしくお願いします

【N
コ
ー
ド】

N
8
2
6
4
C

【作者名】

しんりくん

【あらすじ】

FBI捜査官鬼流駆の第2の人生などを中心として展開される本格サスペンス・ミステリー・ハードボイルド・アクション巨編・ついに狂信的信者を続出した教心三部作、完結編！！！！！！！！！！あの男たちがあそこに集うとき、あの力が！！！！

第1章 鬼流駆よろしくお願いします

重たい空だ。近い、近いよ。なんという近さだ。なぜ私に近づいて来ますか。なぜそんなに低く、垂れ込めるのですか。私をその汚らしいヨダレ汁で濡らしたいのか。いや違う。そうか、そうなのだ、私は鬼流駆だ。私の名前は鬼流駆・灯柎なのだ。私には夢がある。あの雲の向こうに燦然と輝いているであろう太陽のような、熱く、大いなる夢があるッ！

ああ、空はこんなに明るいのに私にとってはその明るさが怖い。私は鬼流駆、元FBI捜査官である。

今こうしてジパングのミラーマウンテンパークのベンチで今日唯一の食事、クリイムパンを平らげているなどは・・・

缶コーヒーのゆるい甘さが憎い。

なぜ、こんなことになったんだろう、なぜ・・・

いや、これでよかったんだ。

もう二度とあんな生活には戻れない。いや、戻る気もないが。

私の目の前で学生らしき集団がサッカーをやっている。

ダラダラと謳歌しているな。

私もある意味で自由だ。

何にも束縛されない。

仕事もない、家族もない、もちろんお金もない。

ただその日、その日を恙無く生きていくだけの人生だ。

日雇いのバイトがあれば豪華な食事と漫画喫茶でのシャワー。

バイトがなければ今日のようにクリイムパンのみ。

デエエエエエン ドエエエエエエエン

携帯フォンが鳴っている。

バイト探しのためだけに使っているプリペイド式のフォンだ。私の地元ではテレフォネ・アンチシパダメンチと呼んでいる。

「はい，鬼流駆です。」

出来るだけ愛想良く応えた。

どうやら次のバイト先が決まったようだ。高校生の英語の家庭教師とのことだ。

時給が高く久々にいい食事になりつける。

「よろしくお願いします。」

精一杯丁寧な返事をした。

私には夢があった，大きな夢が。

しかしその夢も今となっては叶わない，悔しい。

ただ，どこかで夢を諦めることができてよかったと思う自分がいる。今のうのと生きている自分，命を懸けて夢を追っていた当時の自分・・・

そろそろ動くか，この時間になるといつも災浄DQNと呼ばれるやんちゃな青少年が現れる。

彼らとは極力接したくない。

暴力を振るわれでもしたら，せつかくの家庭教師のバイトに行けなくなってしまう。

少し歩くことになるが西城大学のキャンパスに移動しよう。

あそこなら少しは安全だろう。

あれだけ照っていた太陽が大きな雲に覆われている。

夕立の予感がしたと同時に大粒の雨が降ってきた。

私は急いで西城大学へと向かった。

第2章 8年前の事件よろしく願います

私には夢があった。

それは友の夢でもあった。

私は友の意思を、友の夢を継いだ・・・つもりだった。
あんなバカなことをしたばかりに私は・・・

この1年間、考えるということを放棄していた。

考えれば考えるほど自分の愚かさ、罪深さに苛まれ生きる氣力を失っていった。

しかし死ぬことはできない、死ねば楽になるかもしれないが、やはり心の奥底では友の事件のことが私を支配しているようだ。

西城大学内に侵入した。

完全なる部外者である私がこのキャンパス内に入ることはすなわち不法侵入だ。

しかしそんなことは今の私にとっては関係ない！
雨はやまないばかりかより強くなっていった。

昔のことを強制的に思い出させようしている雨だった。

友の事件が全ての始まりだった。

その事件は8年前のクリスマスに起きた。

五派四は私の同僚であり親友でもあった。

いつもコンビを組み数々の事件を解決してきた。

年は私より3つ上で友であり兄のような存在であり尊敬していた。

五派四が31回目の誕生日を迎えたのがちょうど事件当日であり、その日に彼は亡くなった。五派四の誕生日パーティーを開く予定だったが始時間になっても彼は姿を現さなかった。遅れるといった連絡もなかった。

時間には几帳面な彼らしくない、何かあったのかもしれない。そう思い私は同僚の酸陀ー損と彼の家に向かったのだ。

そう、急に降り出した雨に打たれながら・・・

第3章 ガレージパーティよろしくお願いします

パーティー会場から五派四家までは車で20分程度だ。

この嫌な感じは、降り出した雨によるプチ鬱（笑）であろうか。

それとも私の研ぎ澄まされた感覚システムが潜在的に何かを感じ取っているのだろうか。

いずれにせよ、私は素朴に以下のように意識することができていた。

「五派四がやばい！」と。

先ほど私は五派四家まで車で20分程度だと言った。しかしながら、我々は車など持っていなかったために徒歩で五派四の家へ向かっていた。

雨も手伝って到着まで2時間はかかりそうだ。彼がやばかろうが我々が着く頃には・・・もう・・・い、いや、考えまい。

ふととなりの酸酩一損を見た。

もはや哀れなほど疲弊しきっている。

彼はいつも自分のロッカーに貯蔵しているワインボトルを右手に持ち、歩きながらラッパ飲みしていた。

当然のように傘も差していないため、我々はビショビショに濡れそぼっていた。

「サセーン、こいつがあらへんとどうも調子でえへんやんか・・・」
彼は困ったように笑った。

そのことは彼が話す際に眉間に入ったシワで把握できた。

「シツハ、シハシハ、イイデース。今日のガレージパーティはプールサイドに変更デース」

「歌いまショウ！」

「フーンフフーンフーンフーンフーーン フーンフフーンフ
ーンフーンフーーン」

そうこうしていると、五派四ハウスが見えてきた。
見慣れた家だが今日はなんとなく雰囲気違った。
家の中から奇妙な臭いがしている。何かおかしい。

しかも家から黒い煙のようなものが立ち上り、上空でうずを巻き、
とぐろを巻いている。

庭に生えている草も奇妙にうずを巻いていた。

不吉な予感がする。

これ以上先に進んではいけないと体が忠告しているかのように1歩
進むことが非常に重く感じる。

五派四は無事なのか。職業柄最悪の状況を想像してしまうが、無事
だと信じよう。

私はゆっくりと確実に歩を進めた。酸欠ー損は私よりもさらにゆっ
くりと進んでいた。

パーティ会場を出発してから3時間が経過していた。
既に辺りは暗闇に包まれていた。

第4章 五派四ハウスよろしく願います

五派四には美人のウィフがいた。

ウィフは日本人であり、かなりのアジアンビューチーであつた。しかし彼と彼のウィフは一緒に暮らしていない。

彼のウィフはジャパンの研究者らしく多忙であり別居している。

私も彼女とは数回しか会つたことがない。

謎に満ちた女性である。

もしかしたら急に誕生日を祝うために彼女が五派四を尋ねてきたのかもしれない。

もしそうだったら野暮なことはしないでおいたほうがいいか。

死んだ魚の目をした酸陀ー損がようやく私に追いついた。

呼び鈴を鳴らすも反応はまったくくない。

広い屋敷のため、中の様子はまったく伺えない。

五派四ハウスの扉は重厚だった。

2人で一緒に扉を開いた。

ギギギツギツギギツギ

不快な音を立て扉が開いた。

鍵はかかっていなかった。そして玄関の灯りも点いている。玄関にはきれいに磨かれた革靴がそろえて置いてある。

これから出発しようとしていたかのようだが・・・

「ミスター五派四！いマースカ？」と私は叫んだ。

「五派四さん、何してはるんですか？」と酸陀ー損がそれに続く。

まったく返事はない。

「手分けして探シマシヨウ、酸陀ー損！」

私はリビングへと向かった。酸陀ー損は2階へと向かった。

リビングには誰もいなかった。

キッチンと庭を確認したが、はたして人影はなかった。

一通り1階は探したが・・・

私は駆け足で2階へ上がった。

「酸陀ー損、どうでシタカ!？」

「NOですわ、寝室にも書斎にもいてはりませんわ。」

「困りマシタ・・・どこへ行ってしまったんでシヨウ？」

「おほお、あかん、あかん。漏れそうや、ちょっとトイレいってくるわ。」

「お前は頻尿野郎デースカ!!!!!」のん気な酸陀ー損に怒りをおぼえた。

「OHHHHHHHHHH，MMMMMMY，GODDD
DDDDDD！！！！」

酸陀ー損の絶叫が響いた。すぐさまトイレへ向かった。
死んだ魚のような顔をした酸陀ー損が突っ立っていた。
彼の視線の先に五派四の変わり果てた姿があった。

第5章 あの日あの時あの事件よろしく願います

「五派四・・・なんてことデースカ!!!!!!」

五派四、いや、かつて五派四であったそれはトイレの床に仰向けに倒れており、既に腐り始めていた。部屋に立ち込める特有の臭氣がそれを示唆していた。それに五派四は確かに地黒ではあったもの。ここまで紫色を含んだ暗褐色ではなかったし、眼窩周辺の異様なくぼみは私がかつて葬儀屋でバイトをしていたときにも確認した。血液だ。また、鼻からどす黒い液体が流出しているのも確認した。血液だろうか？ペロリ・・・こ、これは腐敗した内臓汁だ。意外と腐敗が進行している。触ってみると四肢などはカッチカチだ。まだ暖かい時期だとはいえ、これはかなり時間がたっていそうだ。少なくともパーティ時間に生きていた可能性はないだろう。今朝かそれより前に絶命したと思われる。気がかりなのは未だ死因が見えてこないことだ。鼻から流出していたのは血液ではなかったし、そもそも目立った外傷が存在しない。着衣の乱れもないようだ。まあ、ただの病死かもしれないしそこまで調べる必要は無いか・・・現状では説明できない事柄も散見されるが・・・仕事柄勝手にいろいろと考えてしまう・・・フッフフ、悪い癖だ。

「ちょ、な、なにしとんねん!!」

参打ー損の存在を忘れていた。彼は醜くうろたえている。

「残念デスガ・・・」

「ご、五派四死んどんやろ？は、はよサツ呼ばな!!」

そういえばすっかり忘れていた。まあ私にはサツなど呼んでも足手まといにしかならないのだが・・・それにその前にやるべきことは

ある。

「はい（イエーツ），しかしながら，チョットだけ気になることがあるのデース」

「なんかしとんねん！はよ呼ばなかんやろがボケが！」

「シハシハ，落ち着きナサーイ。まず気になったことの一つ目は，施錠デース」

「なんやと？確かに便所は開いとったがそんなもん関係あらへん。俺かていつも開けっ放しや」

「あなたは少し人と違うタイプみたいですなシハシハ。まあトイレもそうですが．．．私はこの家の玄関すらも戸締りしてなかったのが気になりマース．．．」

「俺それこそいつも戸締りせえへんで！」

「アナタと一緒にしないでクダサーイ。普通は閉めマース。それに彼はコウ見えても捜査官デース。悲しいことデスガ我々は家でも油断できませーん」

いちいちこのクズのような酸欠ー損の相手をするのは疲れる。だが今の段階で勝手にサツを呼ばれて現場を荒らされないためにもこのカスにいちいち説明しなければならぬのか。

「次に，この倒れ方デース」

「普通こんなもんやろが」

「マズ，仰向けに倒れているというのは変デース。普通こういうところで死ぬ人は便器に向かって，時に便器の中に顔を突っ込んで絶命してイルのがセオリーデース」

「ま，まてや，こうも考えられるんちゃうか。つまり，ババし終わって立ち上がったときに発作かなんかで．．．ああっ！！」

「便座は．．．上がってマース．．．」

第6章 オペラナイトよろしく願います

在りし日の回想に耽溺する私を、現実には嘲笑うかのようだ

明日になれば何か良い事があるだろうな、少なくとも状況は変わるかもな、かつてはそう思っていた私も、今や昨日と同じ今日、今日と同じ明日を受け入れてしまった敗者だ

ポケットから取り出したカード明細を、私は額面も確認することなく破り捨てた

ここまで来たか…

西条大学の校舎内に飛び込んだ

雨をしのぐことができる

それだけでも今の私には大きな救いの手が差し伸べられたようなものだ

警備員に見つかったらどう答えたものか・・・

まあいい深くは考えまい

何も考えずただぼーっと降り注ぐ雨をひたすら眺める

まるで雨に祈る崇高な宗教のようなものだ

ただ雨を眺める

これは以前の私には到底できなかった行為である

いや、このような行為は無駄であると信じていた

あの頃の私は少なくともそういう人間であった

五派四の変死体を見つけてからの私は必死で現場の状況把握、分析、捜査に没頭しかけた

悪い癖だ

そしてポリスに連絡しようとした酸蛇一村をバカ呼ばわりし（実はしていないのだが）、徹底的に懲らしめ、侮辱し、誹謗し、自己満足の世界に浸っていた

親友が死んだというのにだ

結局、酸蛇一村が呼んだ警察により私たちは事情聴取という最悪の拘束を受けることになった

事情聴取中は酸蛇一損がまともにしゃべっていてくれたのが救いだ
った

翌日の夕方になり解放された私たちのもとにパーティー参加（予定だった）メンバーが集っていた

差異、出湯法度などの華やかな面々はもちろんのこと、陶淵明氏や
円李家、情事、玲名安登なども集まった

そして私たちは一致団結した

五派四事件の捜査を独自で行うことで

第7章 ゆかいな仲間たちよろしくお願いします

独自捜査を始めることにした我々だったが・・・

大きな障害に直面してしまった

実は・・・

正式なポストがあつたわけではないが、五派四は我々のまとめ役でありリーダー格であつた

彼にしか我々のような濃い面々を束ねることが難しかったのだ

しかしその五派四がおつ死^ちんだ

個性の強すぎる各自は暴走する一方となつた

我々はまったくまとまりがない集団，まさに烏合の衆であつた

寡黙で何を考えているかわからない沈黙の女王、差異

出湯法度は暴走彗星と呼ばれるほどの無鉄砲さがウリ

陶淵明氏は冷静沈着だがかなりの気分屋で自己中心的なため思い通りに動いてくれない

円李家はごつい見た目とは異なりデリケートでナイーブなココロの持ち主

情事は常時お盛ん

玲名安登は元ペテン師でハツタリ野郎だ

ご存知酸陀ー損はあんな感じ

疲れるぜ

我々は今、五派四ハウスに近い（といっても10kmほど離れるが）カフエにいた

酸陀ー損が私に話しかけてくる

「おい、鬼流駆、こんなところでこんなやつらとだらだらやってても何もすすまへんで」

「Yeah...」

「気のない返事すなや！
陰気で根暗な鬼流駆には興ざめや！

ちょっと見た目は爽やかスポーツマン風やゆうても中身がこれじゃあな!！」

「Yeahと言え! キサマなんて支離滅裂な言動しかできないじゃないデースカ!!!!!!!!!!」

「おい、それくらいにしておいたらどうだ、低脳ぷりが溢れ出てるぜ」

と陶淵明

「け、喧嘩は嫌いです・・・えーん、えーん」と差異が泣き出した

「す、すまない、もう喧嘩はしない」と珍しく素直に謝る酸陀ー損よく見ると顔が少し赤らんでいるようだ

通常の彼は北欧の白人男性のまさにそのような青っ白さをしているというのに

「申し訳アリマセーン、ここは一致団結して五派四事件を早急に解決しなければいけなかったデース」

「そのことだが、地元警察が動いているようだが、我々はどのよう
に動くつもりだ?」

と陶淵明

「私に考えがアリマース・・・」

全員の視線が私に集まった

どうもやりづらいがそうも言ってられない

私の思い描く理想の捜査論を展開した

第8章 ビューチーワイフよろしく願います

私はゆっくりと目の前の琥珀色の液体を喉の奥へと流し込んだ。最初に私の眼前に置かれたときよりも明らかに温度が低下しているとはいえ、未だ立ち上る湯気はその液体の持つ芳醇な気高さを鼻腔に送り届けてくれる。

私はそれらをひとしきり楽しんだ後、ぐると周囲を見渡した。密度を感じるような重苦しい空気だ。全員が思い思いの所作を展開しながらも、意識だけは全て私へと注がれているのが分かる。例えば円李家は彼の傍らに置かれた雑誌の表紙に目を落しながらも、私が口元に付着したコーヒーをちろつと舌で舐める仕草をするだけでビクンビクン反応してくる。私へ向けた視覚的注意が空間解像度の上昇を引き起こしたために（Ling & amp; Carrasco, 2006; Yeshurun & amp; Carrasco, 1998）口元の様子が見えてしまい、私が発言すると思つて身構えたのだろうか。まあ、それ以外にもあまり考えたくない別の理由も挙げることはできるが・・・それはやめておこう。

他にも、情事は風俗情報誌を読んでいたが、耳をこちらに向けたまま、しかもなかなかページをめくらない。出湯法度に関しては特に顕著で、長い間私の顔を凝視している。まあこのビッチは以前からしばしば私にちょっかいを出してきていたし、その気持ちは分からなくも無い。そんなにがつつかなくてもいずれ私とその気になれば望みを叶えてやるというのに。そう、あの晩、私が差異にしてあげたようにだ。陶淵明氏は何かをしきりにメモ帳に書き連ねている。この男はマイペースすぎて思考が読めないところがある。確かに、彼の意見に時折驚くほど正鵠を得たものがあるのも事実だ。

さて、そろそろ披露するでしょう。そう、フェースオフである。

「コレカラの事デスガ・・・」

私が発声すると、非常に短いラグとともに円李家がビククンツと大反応した。

「そ、その言葉を待ってましたよ」

やっと私の尊顔を拝すことを許された円李家は、ものすごい表情でこつちをみている。先ほど頭を一瞬よぎった「あの仮説」を想起させられる・・・

「君ならまずは何をシマスか？」

円李家は慌てた。

Estimate: Aquil

ひどいものだ。これはダメだな。

「むう．．．ジャア、酸陀一損、キミハ？」

「俺でつか？ そやなあ， まあ実ゆうとな， 俺は五派四の妻が怪しい
 思てんねや． ほやから妻しよっぴくんが最初や思おとる」

「ナゼデース？」

「え？　だってどう見ても怪しいやんか。あの家に自由に出入りできるし、五派四に一番近い人物やし、謎だらけやし」

「それだけデスカ？　じゃあさらにオタズネシマース。なぜワザワザ自分が怪しまれる自宅で、自分が明らかに不利になる場所で殺害したのデシヨウ？　最も親しい人物ならば五派四をどこに呼び出すことも可能デース」

「そ、それはやな、そらカツとなってやってもうたんやったら家かて現場になるやろが！」

「百歩譲ってそうだとしても死体を放置するのはおかしいデース。しかも犯人には死体を片付ける時間も十分アリマーシタ」

「せやからこそ逆に……ってこともあらへんか？　なあ？　そやろ？」

やたらと食い下がってくる酸陀ー損に少々驚いた。しかしこの短いやり取りの間に彼が4度も差異の方に目をやったのを私は見逃さなかった。

「分かりマーシタ．．．五派四の妻を捕まえたいという君の熱意は理解しまシタ。しかし私の考えはそれとは少し違いマース」

「き、聞かせてみいや」

フッフフ、ちょっと立場を配慮した言い方をしてあげるとすぐに折れる。やはり体面を、この場だからこそ体面を気にしていたのだな。私と二人だけのときならばすぐに下を向くくせにな。

私はコーヒーを一口含み、口元をナプキンで丁寧にふき取った。

「酸陀ー損、君の出発点は犯罪そのものデース。つまり、犯罪に関して得られた証拠と容疑者リストを付き合わせ、”なぜ”犯罪が生じたか、また犯罪を立証するのに十分な情報は”何か”を精査することシタ。これらの作業において君の最大の関心事が犯行の動機を推測することであったのは明白であり、これが正しく行われれば犯人に行き着く可能性が高まることを君は信じていマース」

「お、おう．．．なんやいきなり．．．」

「一方．．．」

私は酸陀ー損の方言にあわせて、「一」の方に強いアクセントを置いて続けた。

「一方、私のパラダイムは”何が”に関する資料を閲覧し、犯人は”誰か”を推測することデース。すなわち、確率判断により様々な犯罪者のタイプについての領域固有の知識を駆動し、当該犯罪と過去の犯罪とを照合し、それと一致する犯人のタイプおよびそれに顕著な行動様式の推定を行いマース」

「ご，御託はええっちゅうねん！！！！」

酸陀ー損がなぜか金八キャラのように起立して叫んだ。

「結局お前はどないしたいんや！それをワシらは知りたいんじゃ！！！！」

「分かりまシタ・・・結論から言いマース。私は，五派四の妻は可能性が低いと看做していマース。本件には不可解な事実が多すぎマース。例えば，先ほど言いましたように殺害現場，遺棄現場の問題は未だ理解できていまセーン。それに君とハウスで検討したように，死体の状況にも不明な点が多くありマース。これらは五派四の妻が犯人であると仮定した場合に，それから予測される行動とは一致しまセーン」

「なんやと？せ，せやったらどないするゆうねん？同じこと何回も言わすなや！！！！」

「君は少し五月蠅いな。黙っていてくれないか」

終始静かであった陶淵明氏が動いた。しかしその目の奥には熱いものが感じられる。

「ぐ，ぐむう・・・」

「しかし，私も酸陀ー損君と同じく，君がどうしたいのかがまだ分からない。それを聞かせていただきたい」

「そうデスね・・・以上のような理由から，五派四の妻を搜索することにメリットが見出せまセーン。それに妻などとくに警察が押さえているはずデース。したがって，私はまずは五派四ハウスのさ

らなる搜索を提案しマース。ハポネス警察にかなり荒らされはしましたが、未だ何らかの証拠が残っているかもしれない。これには私と酸陀ー損で向かいたいと思いマース。その間は、ミナサン独自の捜査をお願いしマース。情事氏は得意の風俗方面から、円李家氏はネットを、そして差異と出湯法度にはハポネス警察の捜査員への体を張ったお色気調査を、玲名跡氏と陶淵明氏は適当にお願いしマース」

「わ、分かった。その通りにしよう・・・」

陶淵明氏は全てをメモっている。各人もとりあえずうなづく動作を見せた。首をひねるものもいるが・・・そう、酸陀ー損である。

「と、いうわけで、散!!!!!!!!!!!!!!」

我々は次に集合する期日を決め、解散した。相互に連絡を取り合う手段として全員が携帯電話を持った。私と酸陀ー損は再び五派四ハウスへ向けて10キロの道を歩き出した。やれやれ、また2時間にかかるか・・・

終始首をひねっていた酸陀ー損が口を開いた。

「なあ・・・やっぱおかしいで。五派四の妻は絶対押さえとくべきやと思うで。もちろん既に官憲の手が及んでいると思うが、当たってみるに越したことはないで・・・」

「私も同様に考えていマース」

「な、なんやと??????」

「しかしながら、私はそれ以上に我々のうちの誰かが怪しいと考えていマス。そしてその人間は五派四妻と何らかの関わりがある可能性がありマス。もし我々が表立って五派四妻を捜せば・・・逆に、永久に接触することができなくなるでショウ」

「さ、さっきのは芝居やったんか・・・じゃ、じゃあ、いまから俺らで妻を捜すんやな?????」

「いや、とりあえず家を見てみまショウ。きつとそこに五派四妻への手がかりもあるはずデース。現場百遍・・・Evidenceベースの我々にはとてもいい言葉デース」

第9章 奇妙な噂よろしく願います

酸陀ー損とともに五派四ハウスへ向かった

歩くのは疲れたのと、他のメンバーに先を越される可能性もあるため、こっそりとレンタカーを手配していた

レンタカーの運転は酸陀ー損に任せた

彼はなかなかのドライバーだった、なんとも心地よい運転をしてくれる

少しだけ見直した

そんな我々は優雅に、そして颯爽とハウスへ乗り込んだ

つもりだった

途中で見事に地元警察に絡まれてしまった

「よお、何しに来たんだい、鬼流駆捜査官様様」

地元警察で最も有名なポリスマンである魔瑠賦焔がいやらしい表情と口調でおれらに話しかけてきた

「ここを通してくれマースカ」

「ふむ、ここを通すこと〓我々の邪魔をするといっているようにしか聞こえないがね」

「何を言っているのだ、私たちはドライブを楽しんでいるだけだ何を邪魔するのだろうか？」

「その顔が語っている、現場へ行くんだろ？勝手に捜査するんだろ？」

なんとしつこいやつだ
おっと、やばい、酸欠―損がぶち切れ寸前だ

「わかった、わかった、勝手に捜査なんてしないからとにかくここを通してくれ」

「ふん、どうせ、この事件は我々が解決するに決まっているし、もう解決寸前だ

現場にいても何もないぞ、まあせいぜいドライブを楽しむんだな」

怒りで脳の血管がきれそうになったが、おとなしくその場を去った

しかし地元警察が解決寸前というなんてことは・・・
何か決定的な証拠か何かが見つかったのか

そして五派四ワイフがすでに彼らの手にあるということも考えられるま、なにはともあれ

現場にいかなきゃ何も始まらない

現場に何かがあるという確証もないが

そのとき突然酸欠―損が奇妙なことを口走りはじめた

奇妙なのはいつものことだが

何が奇妙かというと彼らしくない標準語で淡々とこちらを凝視しながら訴えるように話し始めたのだ

「鬼流駆さん、私の話を聞いていただいてもいいですか？

実は今回の事件とは関係ないかもしれませんが五派四さんのパートナーについて少し妙な噂がありました」

「妙な噂デースカ？」

「ええ、私が日本に滞在していた頃に聞いたことがあるんです、五派四さんのパートナーは研究者です」

「ああ、研究者ってことは知っているが」

「何の研究をしていたかご存知ですか？」

「医療関係だったかな」

「そう、表向きは医療関係で世界を飛び回っていると。ただ裏ではあるテロ組織に所属しているらしいのです。」

「テロ組織デーストツ!!」

「その組織の名は『アパチーズ』」

アパチーズ・・・私はあまりの衝撃に失神&失禁しそうになった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8264c/>

よろしくお願いします

2011年10月4日11時30分発行